

Steel 鉄の点景 Landscape

ピッケル



「山の道具の中で、ピッケルほど形のいいものはない。

何ひとつ加えても何ひとつ欠いても具合の悪いほどあっさりしている」

1928年スイス・ヴェッターホルン西山稜を初登攀した登山家・浦松佐美太郎はこう表現している*。

ピッケルは、登山家の手となり足となり、厳しい道のりを頂上へと導く。

シンプルな形状に集約された機能性は、多くの登山家を魅了してやまない。

“登山家の魂” ピッケル

ピッケルは、ドイツ語のアイスパッケル (Eispickel) の略で、英語ではアイスアックス (ice axe)、日本語では氷斧と訳されることもある。雪山では必要不可欠とされる登山道具で、杖として使ったり、氷をカッティングして足場を作ったり、滑落停止やバランス保持、ザイルの支点などさまざまな用途で使われる。多くの雪山初心者にはピッケルの使用訓練を積んでから山に挑む。雪山や特に凍った斜面では体の一部のようにピッケルを使いこなすことが求められるからだ。たとえば足を滑らせた場合、的確にピックを雪面に打ち込み、滑り出した身体をくい止める必要がある。さまざまな場面で命を守ってくれるピッケルは、“登山家の魂”と表現されるほど重要な働きをし、登山者のシンボルとして大切に扱われてきた。



アイスクライミング用ピッケル

氷壁に過重をかけるときは抜け難く、抜重時には抜きやすいよう先端にキザミ刃がついている (カジタックスベシヤリストマークⅡ ペント)

ピッケルは、ヘッド、シャフト、シュピッツェ (石突) のわずかな部材

で構成されている。材料はメーカーによりさまざまであるが、最近の国産モデルでは、ヘッドは摩耗しやすいので、耐摩耗性を持ち



しかもマイナス50℃に耐えうる低温靱性を持つニッケルクロム鋼、シャフトは軽量で強度にすぐれた超々ジュラルミンを採用し、シュピッツェはステンレス鋼を使用している。形状は、使用目的に合わせてさまざまである。たとえばピックのカーブが比較的にゆるやかなものは一般縦走用、ピックがくの字型に曲がっているものは、氷壁を専門に登るアイスクライミング用に特化されている。長さも杖として使うことが多い一般縦走用は70cm前後であるのに対し、氷壁に登るアイスクライミング用は50cm前後と短い。機能の違うピッケルを数本装備し、使い分けながら登攀する登山家もいる。

*:『たった一人の山』浦松佐美太郎 (1941年)



国産ピッケル第一号

昭和4年に山内東一郎が製作したピッケル(右、大阪・好日山荘所蔵)と昭和5年に門田直馬が製作したピッケル(左、札幌市立冬のスポーツ博物館所蔵)

(写真:渡辺正和)



上から、18世紀につくられたアルプスの氷斧。日本人により持ち込まれたフリッツ・イェルク作ピッケル(加賀正太郎所有)。これをもとに作られたピッケル(高頭仁兵衛所有)―長野・大町山岳博物館展示

(写真:渡辺正和)

鍛冶屋から生まれたピッケル

ピッケルはスイスで生まれた。狩猟や鉱物資源を探索、採掘するために氷山へ登った人々が使った杖と斧が次第に合体してできたものが起源とされる。その後観光として山へ足を踏み入れたのは、裕福なイギリス人らであった。彼らは氷河見物を目的とし、山案内人が彼らの足場をつくるためにピッケルを用いた。

1787年、スイス人科学者ド・ソシュールによるモンブラン登頂をきっかけに、近代アルピニズムが幕を開ける。登山活動が本格化すると、山案内人への需要も増え、彼らは山麓近くのおもに農具などをつくって^{とびぐち}いた鍛冶屋に自分専用のピッケルを求めた。当時のピッケルは^{とびぐち}鳶口の形をしていたり、シャフトの長さが1m以上あったりさまざまであった。

山麓の鍛冶屋はヘッドの形状や材質、焼き入れの具合など模索と改良を重ね、鍛造で一本一本作っていった。次第に機能が追求されるようになり、19世紀半ばには現在に近い形に整えられる。フランスの「シモン」やスイスの「シェンク」、「ベント」、「ウリッシュ」。当時のピッケルに刻まれた職人の銘は、現在世界有数のピッケルメーカーとしてその名が引き継がれている。

世界と肩をならべる国産ピッケル

日本では、20世紀初め頃からヨーロッパのピッケルが持ち込まれ、輸入品が広まるようになるが、当時のピッケルは非常に高価だった。そのような中、安価で優れた国産ピッケルを求める学生の動きが仙台と札幌で起こる。

仙台では、東北帝国大学の山岳部員で金属工学を学ぶ梶田

定司らが同大学の金属材料研究所鍛錬工場の元鍛冶職人、山内東一郎に依頼し、輸入品をモデルに試作を重ね、1929(昭和4)年頃、炭素鋼を材料に第一号をつくった。当時の梶田氏の論文^{*1}には、低温での衝撃抵抗などからニッケルクロム鋼がもっともピッケルに適すと記述されている。梶田氏らは何度も鍛冶場に足を運んでは助言し、やがてニッケルクロム鋼ピッケルを完成させる。

その頃北海道帝国大学^{かどた}の山岳部員、和久田弘一も、農機をおもに製造していた門田鉄工場^{かどた}に依頼し、1930(昭和5)年、ニッケルクロムモリブデン鋼を材料にピッケルを製作した。軽量で、硬度の高いピッケルの誕生である^{*2}。この二つの国産ピッケルは輸入品に比べて安価で、登山者の間に急速に広まっていった。

1936(昭和11)年、立教大学山岳部^{かどた}は門田のピッケルを携え、ヒマラヤ・ナンダコト(標高6,860m)の初登頂に成功する。ピッケル第一号が生まれてからわずか6、7年、国産ピッケルのすぐれた品質と機能は、世界の舞台で立証され、その名を広く知らしめた。技術者の熱意と鍛冶屋の努力が果たせた成功である。

最近、ピッケル1本をこよなく愛用する登山家は少なくなつたと言われるが、それでもやはり、ピッケルは登山家にとってどうしても持たたい山道具である。登山家の山への挑戦が続くかぎり、作り手の情熱はピッケルを進化させ、クライマーを頂上へと導くであろう。

●取材協力: 布川欣一氏[『山道具が語る日本登山史』((株)山と溪谷社)著者]、(株)山と溪谷社、(株)カジタックス

*1: 「ピッケル及びシュタイグアイゼンの組成と鍛錬」『ケルン』1935年6月号((株)山と溪谷社所蔵)

*2: 「アイスピッケル及びシュタイグアイゼンの材質に就て」和久田弘一「北大山岳部々報」第四号(1933年)所収((株)山と溪谷社所蔵)